

1 クリューバー・バレラ染色における
2 クレシル紫液の検討

3
4 小木義貴 小野寺清隆 鈴木学 米川球恵
5 山田千裕 岩井優 大木昌二
6 (千葉大学医学部附属病院 病理部)

7
8 【はじめに】クリューバー・バレラ染色 (KB 染色)
9 において、従来より使用してきた MERCK 社製クレシ
10 ル紫が供給停止となり、代替品としてクレシル紫・
11 酢酸塩を使用したところ、染色性の変化・不安定化
12 を経験した。クレシル紫は液の pH によって染色性が
13 変化することから、染色液調整の際に添加する 10%
14 酢酸の量によって pH を変化させ、クレシル紫・酢酸
15 塩液の至適条件の検討を行ったので報告する。

16 【材料・方法】15%ホルマリン固定、パラフィン包埋
17 された大脳の切片 (6 μm) を用いた。

18 KB 染色の手順はルクソールファースト青染色後、分
19 別までは成書に従い、クレシル紫・酢酸塩液を従来
20 法(10%酢酸 5 滴添加)と、10%酢酸で pH4.0、3.8、
21 3.6、3.0 に調整したもので 37 /5 分間染色した後、
22 95%エタノールを用いて分別した。

23 【結果】クレシル紫の色調は、pH3.8 が神経細胞の
24 核やニッスル顆粒の染色性が最も良好であった。
25 pH4.0 では過染傾向や大脳皮質への共染を示し、
26 pH3.6 では共染は無いものの淡染傾向となり、pH3.0
27 では特に核の染色性の低下が見られた。また、従来
28 法で調整した場合、pH は 4.0 付近であり、過染傾向
29 を示した。クレシル紫・酢酸塩は、クレシル紫に比
30 較して青味が強い傾向がある為、ルクソールファ
31 スト青染色の分別と併せ、pH を 3.8 に調整すること
32 で良好な染色結果が得られた。

33 【まとめ】KB 染色に限らず、特殊染色においては色
34 素・試薬の変更によって染色性が異なることが稀で
35 はなく、染色性に変化が見られた場合は pH をはじめ
36 種々の要素を見直す必要があると思われた。

37
38 連絡先 043-222-7171
39